

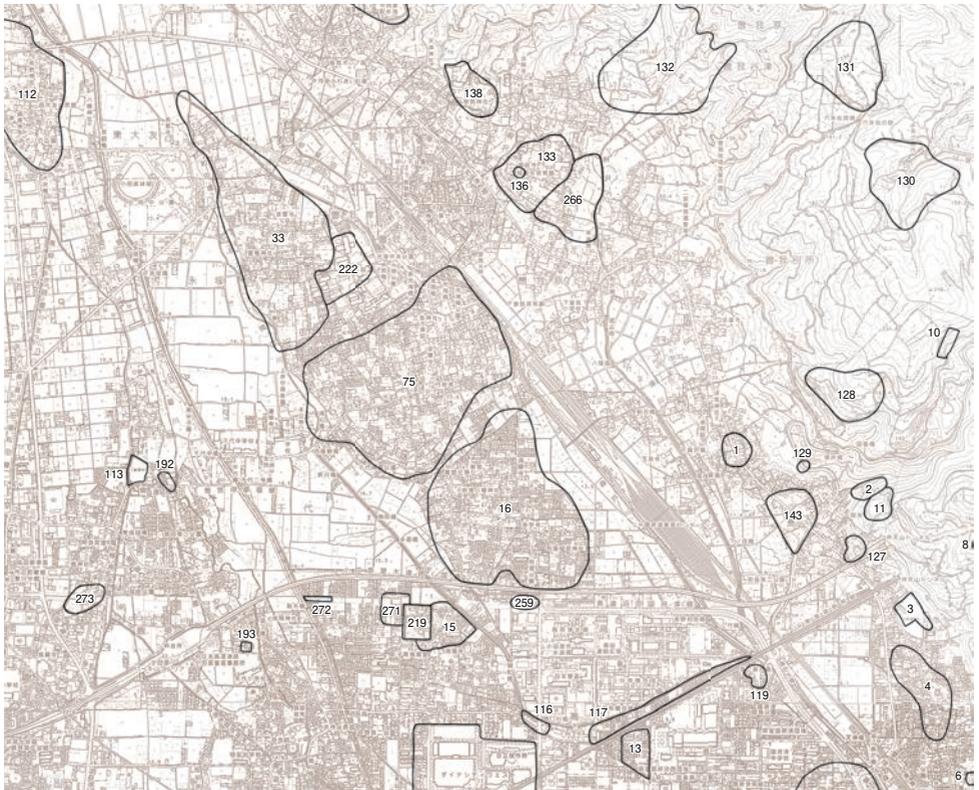
別堀遺跡群

ごぞなくそうろう
—「無御座候」の村—



例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今号は第16号として、小田原市別堀に所在する別堀遺跡群（小田原市No.16遺跡）を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、令和2年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同） 伊藤千沙子、小金澤彩可、小金澤保雄、山口剛志、株式会社珠流河国文化財調査研究所
- 4 本書の作成は、小田原市文化財課三戸芽が担当者となり、同課大島慎一・佐々木健策・土屋健作・土屋了介・吉野文彬・野尻夏姫の協力を得ました。写真の撮影・編集は、市毛秀人の協力を得ました。
- 5 写真・図版のキャプションに記した地点名の略記（J1、M1等）は、第2図および表1・2と対応します。
- 6 本書で取り上げた調査地点には、報告書作成中のものが含まれます。そのため、調査所見等は概要報告の時点でのものとなりますので、内容が異なる部分については刊行された報告書を採用してください。



第1図 遺跡周辺位置図（1/30,000）

[表紙] 別堀前田遺跡第Ⅱ地点の木組み遺構（東から）

[裏表紙] 別堀前田遺跡第Ⅰ地点出土銅鏡

I 別堀・高田周辺の遺跡

1 別堀の地名

本書で取り上げる別堀遺跡群はNo.16遺跡内に所在し、森戸川の西岸に位置する千代台地と呼ばれる標高約20～30mほどの小高い丘の最も南側に立地します(第1図)。

「別堀」という地名は、『新編相模國風土記稿』によると、周囲を「高田」と呼ばれる地域に囲まれた、堀で囲われた範囲を指していたとされます。現在、地名としては「別堀^{まえだ}字前田」、「別堀^{じゅうにてん}字十二天」、「別堀^{ひがしでど}字東出戸」の三つの小字が残されており、その中でも「前田」と「十二天」は別堀遺跡群の範囲に該当します(第2図)。

『小田原衆所領役帳』によると、戦国時代の別堀は北条氏康家臣で馬廻衆の久米玄蕃という人物が領主を務めていました。久米氏は瀬谷(横浜市瀬谷区)・森戸(埼玉県坂戸市)と合わせて101貫67文を知行していたと記されており、このうち別堀は33貫200文です。

天保4年(1833)11月「足柄下郡別堀村明細帳」という江戸時代後期の文献には、別堀はわずか7戸ほどの小さな村であり、高田村名主が兼帯していたと記されています。この資料には当時の別堀村がどのようなもので構成されていたのか書き連ねてあるのですが、「一 橋無御座候、一 市立候場無御座候、一 新田無御座候…」など、合計29項目について別堀村にはないということがわかります。

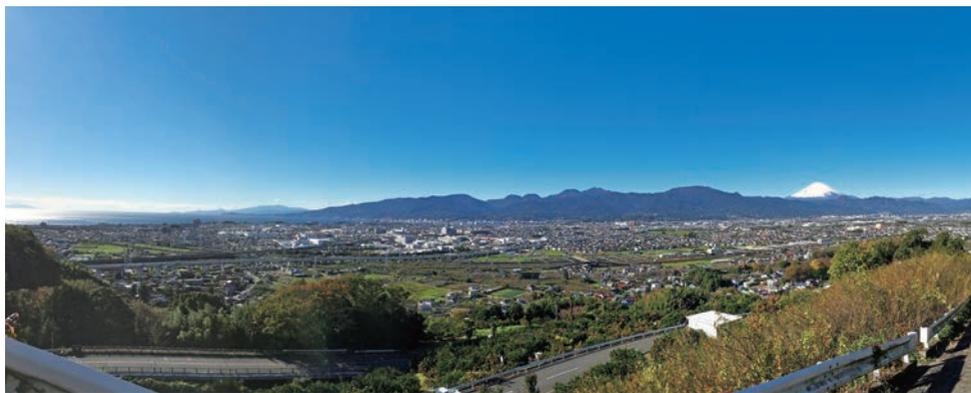


写真1 大磯丘陵から大磯方面を臨む

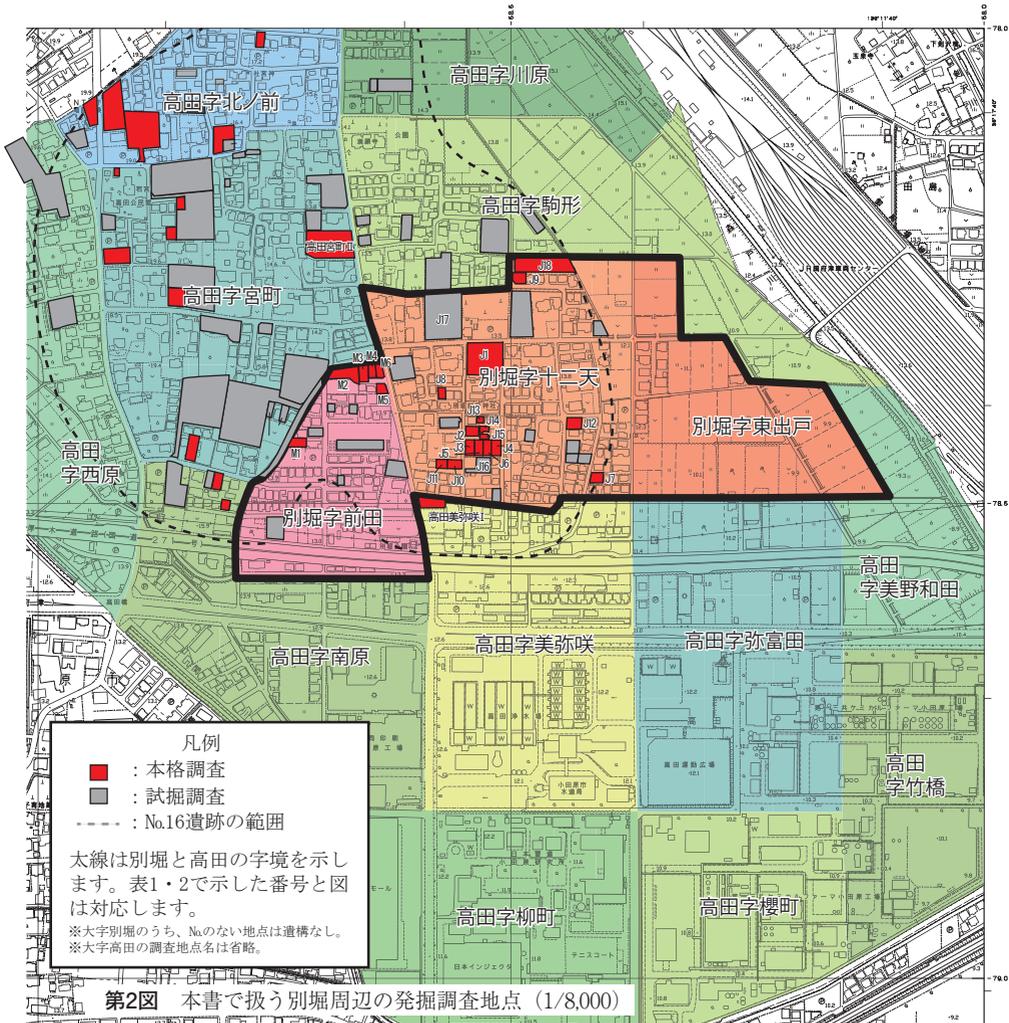


表1 別堀前田遺跡の発掘調査地点

No.	遺跡名・調査内容	所在	調査年月日	検出遺構	出土遺物
M1	試掘	別堀前田126-1	2007.10.31	古墳後期:土坑1・溝1	弥生:土器、古墳~奈良・平安:土師器・須恵器
	本格		2011.05.09~06.15	古墳前期~古墳時代後期:溝1、断層	弥生:土器、古墳~奈良・平安:土師器・須恵器・木製品・銅製品(銅鏡)
M2	試掘	別堀前田102-4	2013.5.29	古墳:木組遺構	古墳~奈良・平安:土師器・須恵器
	本格		2013.6.24~8.17	古墳前期:木組遺構3	弥生後期~古墳前期:土器・木製品、古墳後期~奈良・平安:土師器・須恵器・瓦・木製品、中世:銭貨、近世以降:磁器
M3	試掘	別堀前田102-10	2014.7.18	古墳:木組遺構	奈良・平安:土師器・須恵器・木材
	本格		2014.8.20~10.31	古墳:木組遺構	古墳~奈良・平安:土師器(墨書土器含む)、須恵器・木製品、近世:陶磁器・金属器
M4	試掘	別堀前田102-11	2014.8.5	古墳:木組遺構	奈良・平安:土師器・須恵器・木材
	本格		2014.8.20~10.31	古墳:木組遺構	古墳~奈良・平安:土師器(墨書土器含む)、須恵器・木製品、近世:陶磁器・金属器・銭貨
M5	試掘	別堀前田102-7	2016.4.6	中世:溝	古墳:土器、奈良・平安:土師器・須恵器・板材、中・近世:磁器・漆器輪・板材
	本格		2016.4.20~5.26	中世:溝	弥生~古墳:土器、古墳~奈良・平安:土師器・須恵器、中世:漆器輪、曲物・木製櫛・金属製品
M6	本格	別堀前田102-12	2016.7.11~8.19	古墳:杭列1	古墳~奈良・平安:土師器・須恵器

表2 別堀十二天遺跡の発掘調査地点

No	遺跡名・調査内容	所在	調査年月日	検出遺構	出土遺物	
J1	別堀十二天遺跡第I地点	本格	別堀字十二天75-1外	1991.10.14～11.09	平安：住居跡	平安：土師器
J2	別堀十二天遺跡第II地点	試掘	別堀字十二天89-1	2004.08.09	弥生後期～古墳前期：住居跡1・溝2	弥生後期～古墳前期：土器
		本格		2004.09.27～11.17	弥生後期～古墳前期：住居跡6・溝2・土坑2・焼土6・ピット1	縄文：土器、弥生後期～古墳前期：土器・石製品、古墳後期：須恵器、近世：陶磁器
J3	別堀十二天遺跡第III地点	本格	別堀字十二天88-1	2007.08.07～10.11	弥生後期～古墳前期：住居跡8・土坑1・溝1・地割れ7、古墳～近世：土坑10、近世以降：土坑1・耕作痕	弥生後期～古墳前期：土器・銅製品（銅鏃）、近世：陶磁器
J4	別堀十二天遺跡第IV地点	本格	別堀字十二天88-6	2007.08.07～09.13	弥生後期～古墳前期：住居跡3・土坑4・溝2・ピット7・地割れ5	弥生後期～古墳前期：土器
J5	別堀十二天遺跡第V地点	本格	別堀字十二天88-3	2008.02.25～03.20	弥生：住居跡1・地割れ、奈良・平安：溝2、土坑1、近世以降：畝状遺構9	弥生：土器・石器、奈良・平安：土師器・須恵器（転用陶片含む）、陶器・瓦、中世：陶器
J6	別堀十二天遺跡第VI地点	本格	別堀字十二天88-5	2008.03.20～04.23	弥生：溝1・焼土2・地割れ1、近世以降：畝状遺構2	弥生：土器、古墳～奈良・平安：土師器・須恵器、陶器、中世：陶磁器
J7	別堀十二天遺跡第VII地点	試掘	別堀字十二天57-8	2008.05.23	—	弥生後期～古墳前期：土器
		本格		2008.06.24～07.10	古墳前期：遺物集中1	古墳前期：土師器、奈良・平安：銅製品（銅鏃）
J8	別堀十二天遺跡第VIII地点	試掘	別堀字十二天93-9外	2010.09.29	古墳前期：硬化面1・土坑2・溝1	縄文：石器、古墳～奈良・平安：土師器・瓦
		本格		2011.01.05～02.04	古墳前期：住居跡1・土坑14・溝1・ピット56	古墳前期：土師器・石製品（滑石製勾玉）、近世：磁器
J9	別堀十二天遺跡第IX地点	試掘	別堀字十二天46-3	2012.03.01	古墳～奈良・平安：土坑2・ピット11	古墳～奈良・平安：土師器・須恵器、近・現代：磁器
		本格		2012.04.12～05.08	古墳後期～中世：井戸5・土坑19・溝3・ピット97	古墳～奈良・平安：土師器・須恵器、近・中世：瓦質土器・木製品・土製品
J10	別堀十二天遺跡第X地点	試掘	別堀字十二天96-7	2012.02.10	弥生後期～奈良・平安：住居跡1・土坑5・ピット3	弥生後期～古墳前期：土器、古墳後期～奈良・平安：土師器・須恵器・灰釉陶器
		本格		2012.04.13～06.25	弥生後期～古墳前期：住居跡・溝、古墳後期～奈良・平安：住居跡・土坑・ピット	縄文：土器、弥生：土器、弥生後期～古墳前期：土器、古墳後期～奈良・平安：土師器・須恵器、近世：陶器、不明：石製品
J11	別堀十二天遺跡第XI地点	本格	別堀字十二天96-31	2013.01.15～03.15	弥生～奈良・平安：住居跡11・土坑51・溝1・焼土坑1	弥生後期：土器、古墳：土師器、奈良・平安：土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品
J12	別堀十二天遺跡第XII地点	試掘	別堀字十二天60-2	2015.04.24	奈良・平安：土坑・ピット	古墳後期：土器、奈良・平安：土師器・須恵器、瓦
		本格		2015.05.11～06.25	奈良・平安：堅穴住居、土坑、ピット、溝、奈良・平安～中世：ピット、中世：溝、近世：井戸	古墳後期：土器、奈良・平安：土師器・須恵器、瓦、中世：陶器、近世：陶磁器
J13	別堀十二天遺跡第XIII地点	試掘	別堀字十二天89-12	2015.08.07、08.10	古墳前期～奈良・平安：堅穴住居、土坑、ピット、焼土集中、溝状遺構	古墳後期：土器、奈良・平安：土師器・須恵器、瓦、中・近世：陶磁器
		本格		2015.05.11～06.25	古墳前期：堅穴住居、溝状遺構、土坑、中世：溝状遺構、土坑墓	弥生後期～古墳前期：土器、中世：石製品、動物骨
J14	別堀十二天遺跡第XIV地点	本格	別堀字十二天89-13、15	2016.01.22～02.29	古墳前期：溝状遺構、古墳～奈良・平安：溝、土坑、ピット	弥生～古墳前期：土器、古墳～奈良・平安：土師器・須恵器、瓦、金属器
J15	別堀十二天遺跡第XV地点	本格	別堀字十二天89-13、15	2016.07.08～08.25	古墳：溝、土坑、奈良・平安：溝、ピット	古墳～奈良・平安：土師器・須恵器
J16	別堀十二天遺跡第XVI地点	試掘	別堀字十二天87	2018.01.10	古墳：溝	古墳：土師器
J17	別堀十二天遺跡第XVII地点	試掘	別堀字十二天96、70-1	2014.06.27	近世：溝	古墳後期～奈良・平安：土師器、中世～近・現代：陶磁器、土器
J18	別堀十二天遺跡第XVIII地点	試掘	別堀字十二天44-1	2018.09.19	奈良・平安：溝、中世：土坑	古墳：土師器、中世：かわらけ
		本格		2018.12.17～2019.03.08	中世：井戸8・土坑4・溝状遺構3・柱穴28・杭列1・不明遺構3	縄文：石器、弥生：土器、弥生後期～古墳前期：土器、古墳中期～奈良・平安：土師器・瓦、中世：陶器・かわらけ、漆器・石製品

明治9年（1876）には中里村名主が別堀村・高田村の名主を兼務するようになりますが、家数は8戸、村人も53人、馬2頭のみと記録されており、現在の住宅の立ち並ぶ閑静な住宅街という別堀とは異なる景観が広がっていたようです。

このように、文献資料に記された別堀の記録を見ると、家の数も少なく、「何も無いこと」が特徴であるとでも言わんばかりの様子ですが、果たして本当にあらゆるものが「^{ごぞなくそうろう}無御座候」なののでしょうか。土地に残された人びとの生活の痕跡である考古学的な情報から、各時代の様子を探ってみましょう。

なお、別堀を囲む高田では、これまで80件以上の発掘調査が行われています。遺跡探訪シリーズ5『高田遺跡群・下堀方形居館—古代高田郷と中世の居館—』で紹介していますので、詳しくはそちらをご参照ください。

2 発掘調査のあゆみ

別堀遺跡群では、これまで試掘調査・本格調査をあわせて53件の調査が行われています。そのうち24地点では遺構が確認されているため、調査地点名が付けられ、発掘調査が行われてきました（2021年2月現在）。

市内有数の調査件数を誇る千代遺跡群（No.75遺跡）と比較すると調査事例は少ないものの、2000年代末以降の宅地化の進行に伴い、調査件数は増加傾向にあり、様々な土地利用の様子が明らかになってきています（第2図、表1・2）。



写真2 写真の左側から永塚・千代・高田の台地が連なる（北西から）

Ⅱ 別堀に暮らす人びと

1 集落でみつかるとの建物のかたち

別堀が位置する台地上には、弥生時代後期から集落が営まれています。後期中葉には環濠集落がつくられ、集落の様相が大きく変容するものの、後期後葉には環濠は埋め立てられ、その上に住居が造られるようになります。

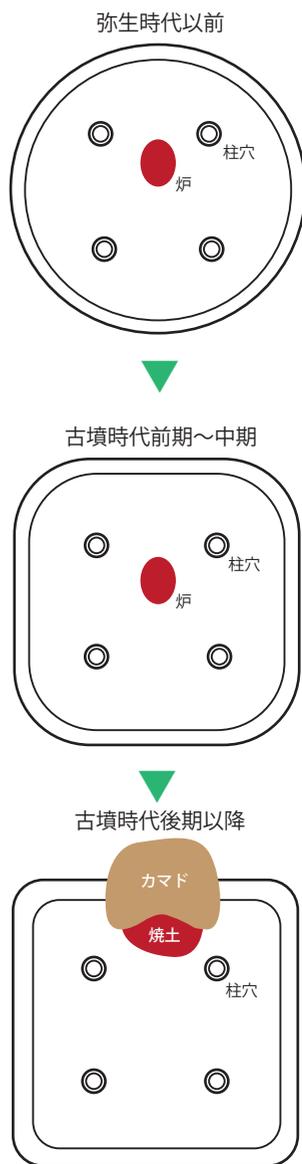
当時の人びとが生活していた建物は、竪穴住居（または「竪穴建物」）と呼ばれ、地面を掘り込んで構築されたものです。これらの建物の掘り込みの形は時代によっておおまかな変遷が見られ、発掘調査の際には出土遺物と共に年代を判断する材料として用いられます。

縄文時代や弥生時代の住居の形は円形や楕円形ですが、古墳時代前期には建物の中央付近に炉をもつ隅丸方形の掘り込みが主流となります。古墳時代中期末から後期初頭ごろになると、炉にかわってカマドが造りつけられるようになります。

このように竪穴の掘り込みの形が変化するのは、上屋や壁などの構造が変わったためだと考えられます。



写真3 調査でみつかった古墳時代後期の竪穴住居跡（J10）



第3図 竪穴住居の変遷模式図

2 地震の影響を受けた集落

No.16遺跡の西側に所在する別堀十二天遺跡第Ⅱ地点(J2)、第Ⅲ・Ⅳ地点(J3・J4)、第Ⅴ・Ⅵ地点(J5・J6)、第Ⅷ地点(J8)では、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が見つかっており、当該期の集落の展開がみられます。

古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡は、第Ⅰ地点(J1)、第Ⅹ・Ⅺ地点(J10・J11)でもみられ、集落が二時期にわたって形成されていることがわかりますが、弥生時代後期から古墳時代前期の方が遺構数が多いため、別堀の集落は賑わっていたと思われます。

古墳時代中期から古墳時代後期の出土遺物として、第Ⅷ地点(J8)の溝から出土した滑石製勾玉が注目されます(写真4)。

別堀十二天遺跡第Ⅳ地点(J4)では、弥生時代後期の住居跡や土坑などが検出されました。この地点の特徴として、北西から南東に数条確認された地割れがあります。隣接する第Ⅲ地点(J3)の調査でも、検出された8軒の住居跡が地割れにより壊されており、住居の形が明瞭ではありませんでした。住居跡は壊されていますが、その

上の土層は壊されていないため、古墳時代前期頃に発生した地震の痕跡と推測されます。

この地割れの中からは完形の壺が出土しました(写真5)。この土器は正位で出土しており、さらに壺の中には別個体の土器片が入られていたことから、地震に対する祭祀儀礼が行われた痕跡の可能性が指摘されています。



写真4 滑石製勾玉 (J8)

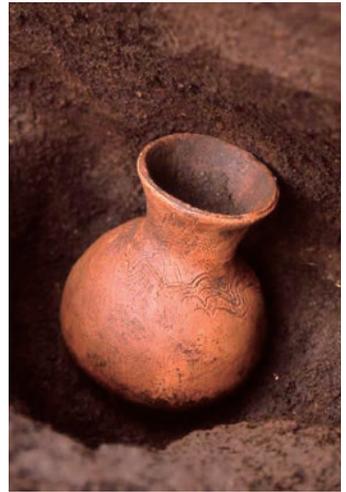


写真5 地割れから出土した土器



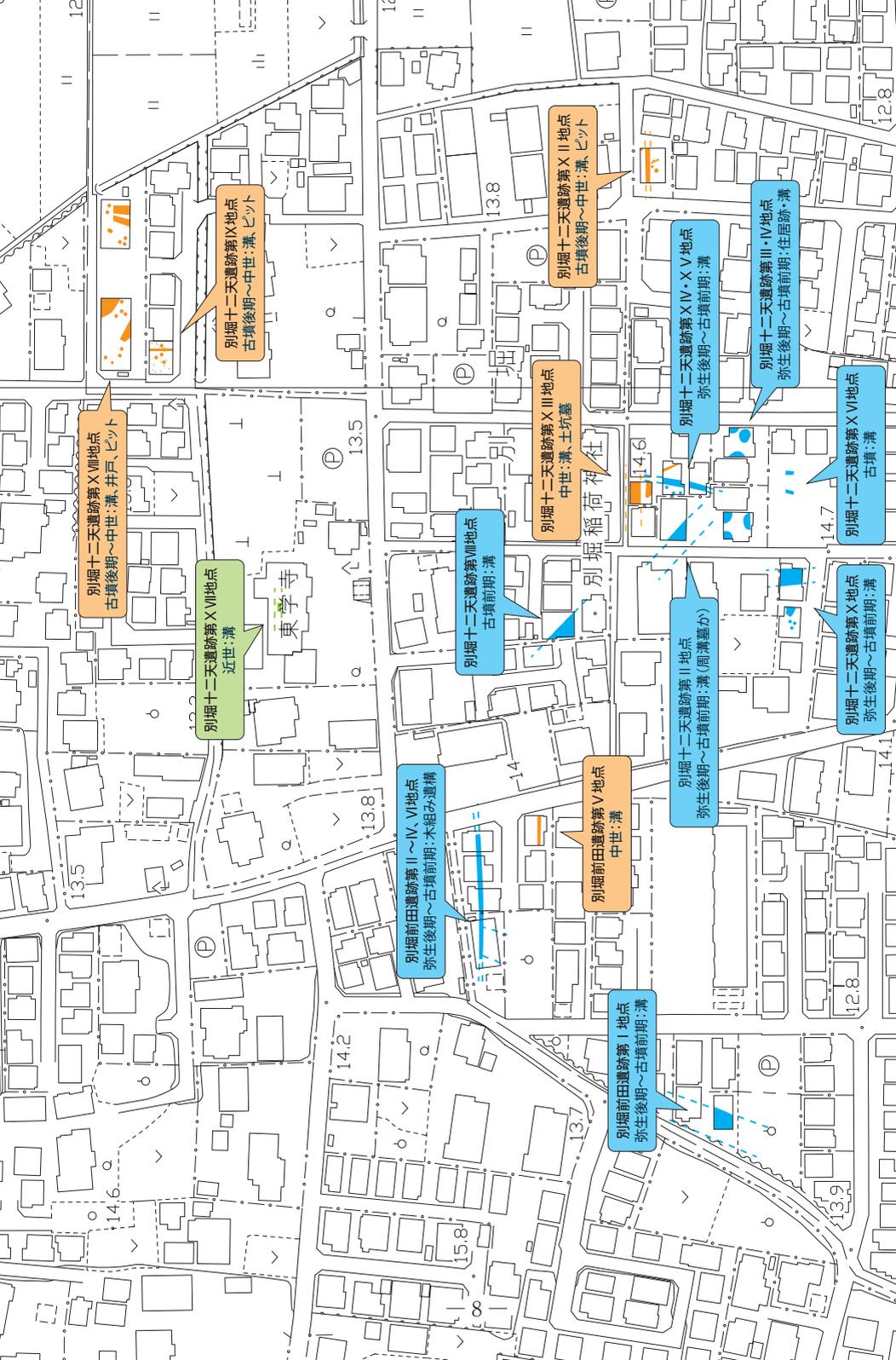
写真6 検出された地割れの痕跡(点線が地割れ) (J3)

(西暦)	神奈川県に被害を及ぼした主な地震	富士山噴火
800	818年 7月 (弘仁9) 相模、武蔵、下総、常陸、上野、下野などで被害。圧死者多数。 878年 9月29日 (元慶2) 相模、武蔵を中心に被害。圧死者多数。	781年 800年 延暦噴火 864年 貞観噴火 937年 999年 1033年 1083年
1000		
1200	1220年 1月12日 (承久2) 「鎌倉地震」。 1227年 3月 1日 (安貞1) 「鎌倉大地震」。所々の門扉・築地等崩れる。 1257年10月 9日 (正嘉1) 「正嘉の大地震」。鎌倉で山崩れ、社寺・家屋倒壊などの被害。 1293年 5月27日 (永仁1) 「永仁の大地震」。鎌倉で社寺・家屋倒壊、焼失などの被害。	
1400	1433年 9月16日 (永享5) 「永享の大地震」。関東で大地震。大山の仁王の頭落ちる。 1495年 8月15日 (明応4) 「鎌倉大地震」。津波で大仏殿が壊れる。 1498年 9月20日 (明応7) 鎌倉で津波により、溺死者200人。	1435年 1511年
1600	1604年12月 6日 (慶長9) 1614年 1月22日 (慶長19) 小田原に被害。 1633年 3月 1日 (寛永10) 「寛永小田原地震」。小田原市内で死者150人、家屋全壊多数。 1645年 9月15日 (正保2) 小田原城の廻り破損。 1647年 5月14日 (正保4) 小田原城内の石垣崩れ、家10軒倒壊。 1648年 4月22日 (慶安1) 小田原城内の石垣など崩れる。 1649年 9月 1日 (慶安2) 川崎で民家140～150軒などが倒壊。	
1800	1703年12月31日 (元禄16) 「南関東駿豆地震」。小田原城の石垣が崩れ、天守等が焼焼。 1707年 7月15日 (宝永4) 宝永地震、被害を受ける。 1782年 8月23日 (天明2) 箱根、小田原で被害が大き、小田原城天守閣が傾き、石垣が崩れる。 1812年12月 7日 (文化9) 横浜で、家屋全壊22棟。付近でも死者、家屋全壊あり。 1843年 2月 9日 (天保14) 「天保地震」。 1853年 3月11日 (嘉永6) 「嘉永大地震」。小田原城天守閣大破、城下の武家屋敷など全半壊。 1854年11月 4日 (安政1) 「安政東海地震」。 1855年11月11日 (安政2) 「安政江戸地震」。 1894年 6月20日 (明治27) 県東部を中心に被害。 1923年 9月 1日 (大正12) 「関東大震災」。小田原城の天守台、本丸、二の丸の石垣が崩落。	1707年 宝永噴火

第4図 歴史時代以降の記録に残る主な地震と富士山噴火

神奈川県西部は、これまで幾度も地震に見舞われてきた地震多発地帯で、マグニチュード7前後の地震が周期的に発生しています(第4図)。特に江戸時代以降は、小田原城の石垣などが崩れるほどの大きな災害に何度も遭遇し、その都度復興を繰り返してきました。千代台地周辺でも、高田美弥咲遺跡第I地点、別堀十二天遺跡第II～VI地点(J2～6)、千代南原遺跡第VII、XⅢ、XⅩⅦ～XⅩⅨ地点などの台地南側の低地帯で地割れや地殻変動の痕跡が観察されています。地割れを引き起こしたこれらの地震の時期の特定は困難です。しかし、災害に見舞われても再び建物をつくりなおし、集落を復旧させてきた人びとの痕跡が遺跡の中からみつかり、自然と共存しながら必死に生活を守ってきた当時の小田原の人びとの努力と苦労がしのべられます。

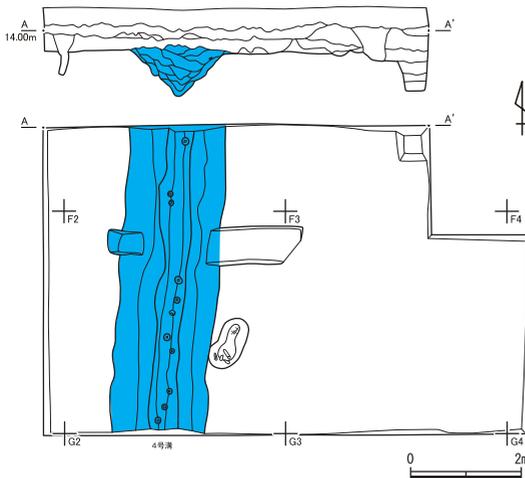
自然災害は地震だけでなく、沿岸部では地震によって引き起こされる津波や、富士山の噴火、そして火山灰の降灰による耕作地の荒廃、飢饉の発生など多岐にわたります。現代に生きる私たちは、先人たちが残してくれた記録を教訓に、日ごろから備えていかなければならないでしょう。



第5図 別堀周辺の遺構の展開図 (1/2000)

3 さまざまな溝

別堀十二天遺跡第Ⅱ・X地点（J2・J10）で発見された周溝墓と推定される上端幅約3.3～4m以上を測る断面逆台形の弥生時代後期から古墳時代前期の大溝を筆頭に、近年この地域では多様な溝がみつかっています（第5図）。第XⅤ地点（J15）では、上端幅約1.8m、確認面からの深さ約0.8mのV字の断面形の溝が確認され、北側隣接地の第XⅣ地点（J14）に続いていました（第6図、写真7）。そしてさらに北側の第XⅢ地点（J13）東側でも、わずかにその痕跡が確認できました。



第6図 南北に走るV字型断面の溝（J15）

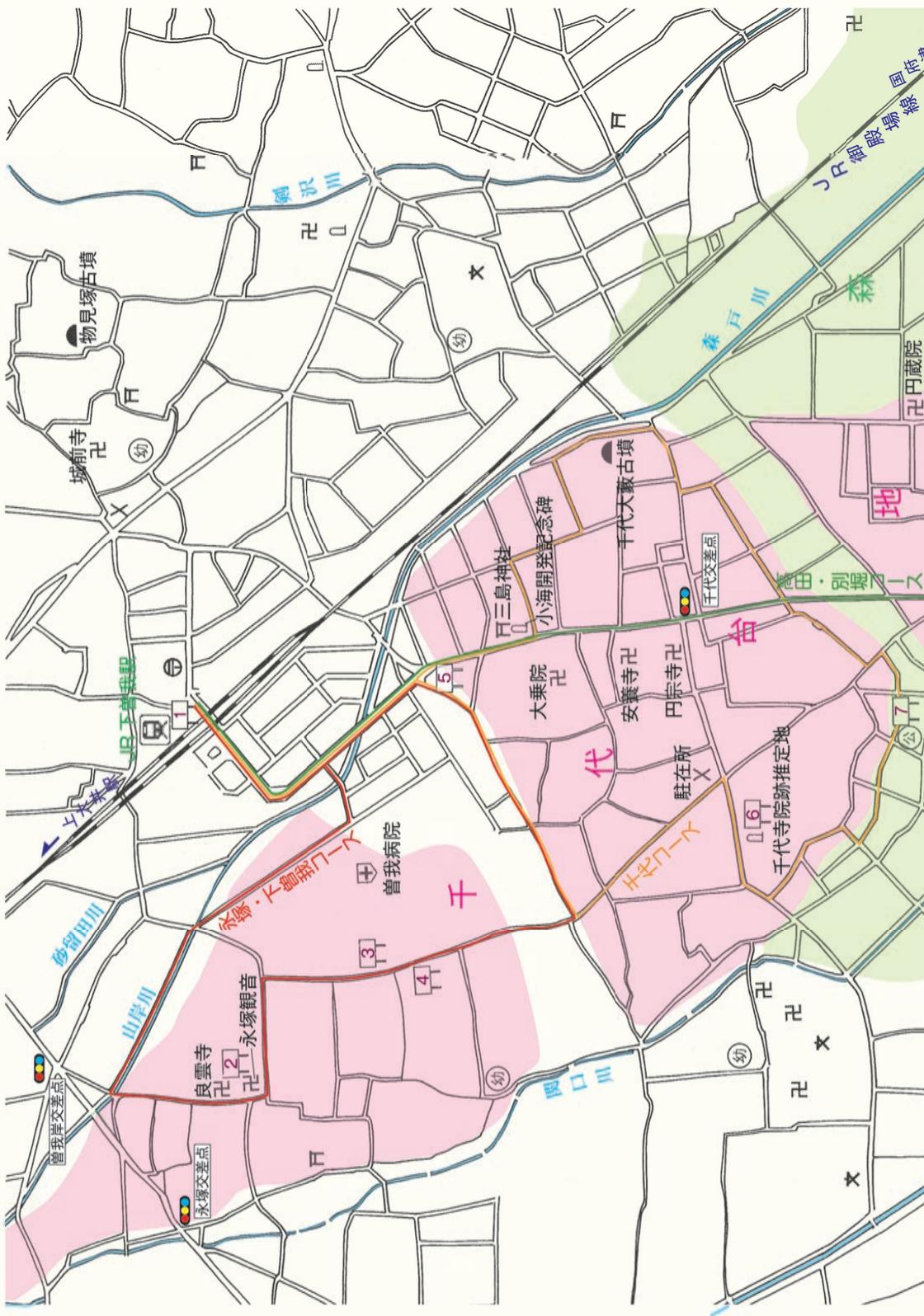
このほか、本書の第Ⅳ章でご紹介しますが、第XⅢ地点（J13）からは調査区北側に沿って上端幅3.6m以上、確認面からの深さ約1.2mの規模となるU字型の大型溝が検出されました。時期は中世に比定され、溝の底からウマの下顎骨がまとも出土しました。第XⅡ地点（J12）でも中世の東西方向の溝が見つっていますが、上端幅は約1.6m、確認面からの深さは約0.8mの断面形は逆台形を呈しています。

大きさや形の違いから、第XⅢ地点の中世の大溝とは性格の異なる遺構であると考えられます。

また、試掘調査しか実施していないため、詳細は不明ですが、第XⅥ地点（J16）では南北方向の溝が、第XⅦ地点（J17）では東西方向の近世の溝が検出されています。



写真7 溝の検出状況（南西から）（J15）



記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

園府

御殿場線

森戸川

森

記

円蔵院

記

地

高田・別堀

公園

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

記

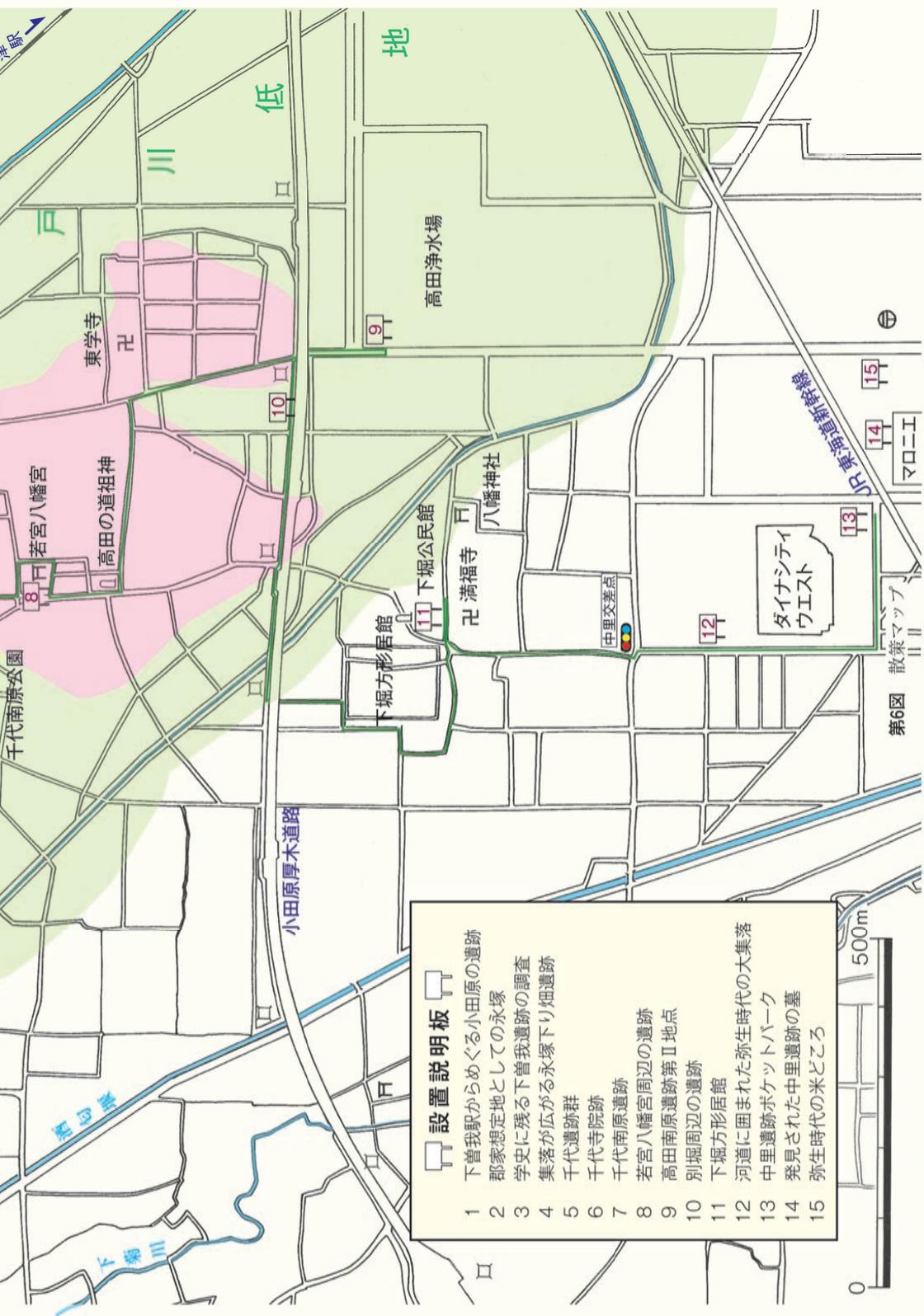
記

記

記

記

記



設置説明板 □

- 1 下曽我駅からめぐる小田原の遺跡
- 2 郡家想定地としての永塚
- 3 学史に残る下曽我遺跡の調査
- 4 集落が広がる永塚下り畑遺跡
- 5 千代遺跡群
- 6 千代寺院跡
- 7 千代南原遺跡
- 8 若宮八幡宮周辺の遺跡
- 9 高田南原遺跡第Ⅱ地点
- 10 別掘周辺の遺跡
- 11 下堀方形居館
- 12 河道に囲まれた弥生時代の大集落
- 13 中里遺跡ボケットパーク
- 14 発見された中里遺跡の墓
- 15 弥生時代の米どころ



第6図 散策マップ

マロニエ

ダイナシティ
ウエスト

中里交差点

下堀公民館

八幡神社

下堀方形居館

高田浄水場

高田の道祖神

東学寺

若宮八幡宮

千代南原公園

小田原厚木道路

下堀川

葛城川

JR東海道新幹線

低地

川

戸

東

北

西

南

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

北

東

南

西

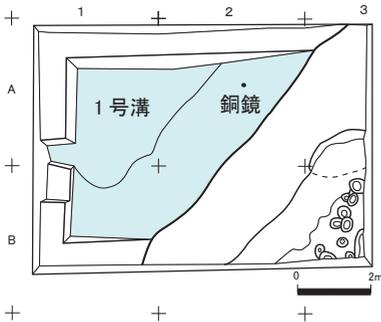
北

Ⅲ 低地部の調査

1 水鳥文様の鏡の発見

別堀前田遺跡第Ⅰ地点（M1）では、古墳時代前期の完形の銅鏡が溝（自然流路）の中から見つかりました。この鏡の文様は、嘴を開けた水鳥6羽と乳（円形の模様）が交互に配置されているものです。古墳時代には鳥形埴輪が作られはじめるほか、石室に鳥が描かれるなど、祀りの場において鳥の文様が象徴的に用いられています。水鳥の文様や乳は中国からの舶載鏡を元に日本列島で製作された倭鏡に多くみられるものです。この鏡には、小さな孔^{あな}が開けられています（裏表紙参照）。そして、この孔の内面は摩耗していることから、紐状のものを通して吊るして使用されたと考えられます。

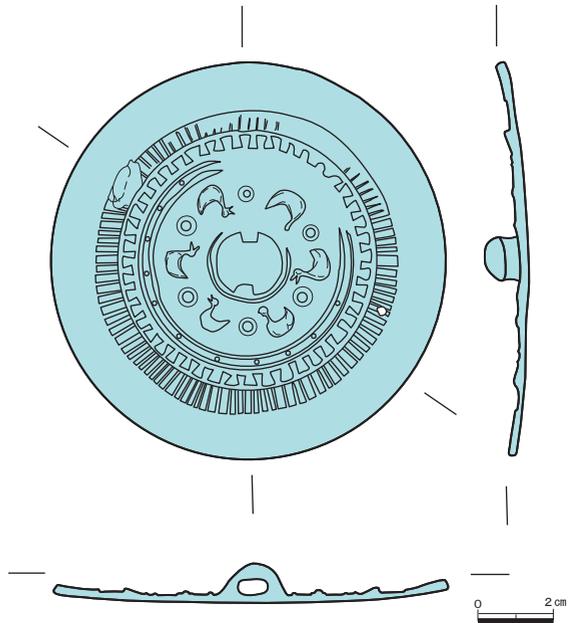
いにしへの別堀に暮らした人びとは、この鏡を吊るし太陽の光を反射させて、大空へ飛び去る水鳥のモチーフに思いを託し、あの世への祈りを捧げていたのでしょうか。当時の精神世界に迫る貴重な資料の発見として注目されます。



第7図 銅鏡の出土位置（M1）



写真8 水鳥の文様と乳（M1）



第8図 銅鏡の実測図（M1）

2 発掘された多様な木製品

別堀前田遺跡第Ⅱ～Ⅳ・Ⅵ地点(M2～M4・M6)の調査では、北西から東側に続く木組み遺構が見つかりました。この遺構は、板材を横に並べ、杭で固定したものであり、建築部材や梯子と推定される木材も転用されていました。横板は、約60～80cmの間隔で杭によって留められており、西から東へ80cm以上の高低差で傾斜していました。

標高の高い第Ⅱ地点(M2)の遺構の残りが最も良好であり、一番東側の調査地点である第Ⅵ地点(M6)の調査では、杭列のみで、横板は残っていませんでした。

これらの木組み遺構は、古墳時代前期に構築された水路または水田などの水田耕作に伴う遺構の一部と考えられます。

出土遺物としては、古墳時代～平安時代のもものが出土しており、特に木製品が良い状態で多数出土したことが特筆されます。柄付木製品、木槽、田下駄、糸巻き具、梯子、曲物、丸木弓や板材など、当時の人びとの暮らしぶりを想起させる多様な道具が見つかりました。



写真9 木組み遺構検出状況(東から)(M2)



写真10 木組み遺構の間仕切り(東から)(M2)



写真11 出土した柄付木製品(M2)



写真12 出土した木槽(M2)

木製品以外では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器や瓦が出土しています。

また、桃の種が多量に出土していることや先端の焦げた小さな板状の木片が出土していることも特色の一つとしてあげられます。

別堀遺跡群の北側には千代や永塚といった奈良・平安時代に郡家や寺院が造られた場所があります。水田耕作に伴う遺構の発見により、この地域一帯は台地上に造られた集落をささえる生産域の一つとして重要な役割を果たしていたことがわかってきました。



写真13 木組み遺構検出状況（北東から）(M3)



写真14 木組み遺構検出状況（北西から）(M3)



写真15 転用された梯子の出土状況（北から）(M3)



第9図 転用される前の梯子のイメージ（M4出土梯子を元に作成）

これまでも小田原市内では、千代南原遺跡第XⅢ地点や千代南原遺跡第XXⅨ地点、下曾我遺跡第1次調査などで古墳時代から奈良・平安時代の梯子が出土しています。これらの梯子は、収穫された穀物を貯蔵するための高床式倉庫の入り口部分などにかけて使用されたものだと考えられています。梯子の下端は逆V字に切り込みが入れら

れており、安定して地面に固定できるような工夫がされています。上り下りするためのステップは、一本の木に切り込みを入れて削り出されているものが多くみられます。そして、長さは2mを超えるものも見つかっていますので、高さのある倉庫などの建物の存在が示唆されます。別堀周辺で多くの梯子が出土していることから、この辺りに多くの倉庫群が存在していたものと推測されます。



写真16 田下駄 (M2)



写真17 糸巻き具か? (M2)



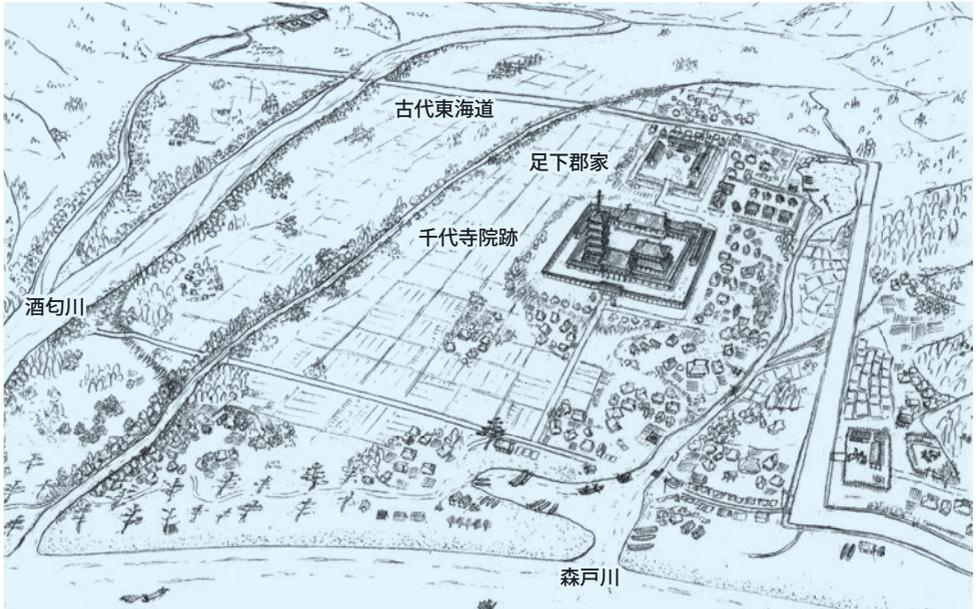
写真18 木製品の脚部 (M3)



写真19 出土した桃の種



写真20 板材に転用され、段差が削られた梯子 (M3)



第10図 古代の森戸川流域のイメージ (画：大島慎一)

集落域の展開という点では、これまでの調査で古墳時代から奈良・平安時代の集落跡が弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡よりもさらに低地部まで広がっていることが明らかになっています。この集落域の拡大が千代寺院跡の創建に伴うものかはわかりませんが、土地利用が変化していく様子がみてとれます。

低地部では、台地上の遺跡では残りにくい木製品や植物遺存体などが残っている場合があります。台地上で出土することの少ない木製品が確認されることで、土器や石器だけではわからない当時の生活を推測することができます。

また、別堀遺跡群は千代寺院跡にも近接していますが、寺院関連遺構などは見つかっていません。墨書土器は数点出土していますが、木簡などは出土していません。別堀十二天遺跡第Ⅶ地点 (J7) で仏教行事に使用される青銅製散蓮華形小匙せいどうせいちりれんげがたこさじが出土しています。これは県内4例目の出土であり、千代寺院跡との関わりが推測されます。



写真21 青銅製散蓮華形小匙 (J7)

IV 別堀に残る中世以降の痕跡

1 みつかった多量の馬の骨

平安時代後期（10世紀頃）になると、相模国全域で遺跡の数が減少し、遺構の数も少なくなるという傾向があります。足柄平野ではその状況が中世前期まで続き、国府津三ツ俣遺跡第XⅢ地点などで中世前期の農村の一部と考えられる掘立柱建物群が見つっていますが、発掘調査で中世前期以降の遺構が見つかることは稀です。

別堀遺跡群周辺では、現在の小田原厚木道路を隔てた南西側の下堀の低地で下堀宮ノ脇遺跡第I地点の試掘調査で12世紀末の完形の三筋壺さんきんこがみつかりました。また、元は甲斐武田氏の家臣であった志村氏の居館とされる下堀方形居館（囲郭）の北西側では、平成18年（2006）に下堀広坪・下堀塚田町遺跡第I地点の調査が行われ、13世紀から16世紀ごろに位置づけられる堀や掘立柱建物跡などが検出されました。

このように、発掘調査件数の増加により、これまで謎に包まれていた足柄平野の



写真22 溝の中から出土した馬の骨（J13）



写真23 馬の下顎骨がまとまって出土 (J13)

中世前期の様相に少しずつ光が当てられるようになってきました。

別堀十二天遺跡第XⅢ地点 (J13) では、大型の溝の下層に動物骨が集中して見つかりました (写真22・23)。出土した動物骨の分析はまだ整理途中のため未了ですが、馬の骨が主体となるようです。そして、下顎骨がまとまって出土しているなど、出土部位に偏りが見られます。この溝の動物骨と同じレベルの覆土からは、宝篋印ほうきょういん塔の反花座かえりはなざが出土しています。

馬の飼育が本格化するの5世紀頃です。朝鮮半島南部から馬飼集団の移住とともに馬を生活に用いる文化がもたらされ、日本列島でも馬の生育・繁殖に成功すると馬を用いた生活様式は広く普及していくことになります。馬は軍事・輸送・農耕に用いられるだけでなく、その肉や皮もあますことなく利用されたようです。

平城京や平安京に代表されるような古代都城においても馬歯や馬骨は数多く出土しており、溝や自然流路から出土する散乱状態の動物骨は、官営の斃牛馬処理に伴う皮革生産の痕跡であると指摘されています。また、牛馬は交通や運搬の手段として重宝されたことから、牛馬を生産し放牧する土地と施設を「牧」と呼び、諸国に

設置されました。小田原市内にも市内西側に「早川牧」が設置されています。

中世以降も馬は農耕や武芸に用いられるなど、人びとの暮らしに欠かせない動物でした。特に東日本では、同じ家畜でも牛よりも馬の方が好んで飼育されたようです。これらの様子から、馬を軍用として飼育しながら、農耕にも使用していた水田経営者としての武士の姿を想像することができます。

小田原市内でも、天神山1号墳で古墳時代の鉄製馬具が出土するなど、古くから馬が人びとと共に生活していた様子がうかがえます。別堀で出土した馬の骨が何故この場所に埋められたのか明らかにするためには更なる検討と、周辺の調査成果で検出された溝やピット群の精査と合わせて検討する必要があります。



写真24 井戸と無数のピット群（南から）(J9)



写真25 東西にのびる溝（北東から）(J12)

2 さまざまな生活の道具

古墳時代前期の木組み遺構が見つかった別堀前田遺跡第Ⅱ～Ⅵ地点（M2～6）のすぐ南側に位置する別堀前田遺跡第Ⅴ地点（M5）の調査では、中世以降の溝から椀



写真26 漆椀の出土状況と「丸に鶴」の文様（M5）

(写真26～31)をはじめ、折敷(写真32)や下駄(写真33)、曲物(写真34)など多様な木製品が出土しました。小田原城周辺の調査ではこのような木製品は多く見られますが、酒匂川以東での出土例はあまり多くないため、注目されます。周辺では、別堀十二天遺跡第Ⅸ地点(J9)や別堀十二天遺跡第ⅩⅧ(J18)地点、下堀広坪遺跡第Ⅰ地点でも木地碗や漆器碗が出土しています。

特に、「丸に鶴」の文様は、小田原城周辺では中宿町遺跡第Ⅱ地点や小田原城三の丸箱根口跡第Ⅱ地点、小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅸ地点などでも見つかっています。



写真27 漆碗 (M5)



写真29 漆碗の裏に刻まれた「木の葉」(M5)



写真28 木地皿 (M5)



写真30 漆碗 (M5)



写真31 漆碗 (M5)



写真32 折敷の一部 (M5)



写真33 下駄 (M5)



写真34 曲物の一部 (M5)



写真35 鎌と櫛 (M5)



写真36 魚の骨 (M5)

この鶴の文様にはいくつかのバリエーションがあり、北武蔵と南武蔵では翼の描き方に違いがあります。別堀で見つかったものは、小田原城や葛西城（東京都葛飾区）の出土例と似ています。

別堀前田遺跡第V地点 (M5) では12点の椀が見つっていますが、箸は1点も出土しませんでした。椀の出土した溝からは、木製の櫛や鎌 (写真35) など良好な保存状態で出土しました。また、これらの木製品などとともに、魚の骨の一部も数点みついています。このような木製品や金属製品の出土から、当時の人びとの身の回りにあった道具の一部を知ることができるため、貴重な発見といえるでしょう。

別堀十二天遺跡第XⅧ地点 (J18) では、井戸と溝の中から漆器椀が4点出土しました (第11図)。井戸は、南側に隣接する第Ⅸ地点 (J9) でも見ついていることから、

別堀・高田の位置するNo.16遺跡の東側には井戸を構築するような土地利用がなされていたことが明らかになってきました(写真24・37)。江戸時代以降の別堀は農村であったようですが、考古学的には畑の耕作痕などがわずかにその痕跡を現代に伝えてくれています。

このように、あらゆるものが「^{ござなくそうろう}無御座候」と江戸時代の文献に記されていた「別堀村」ですが、発掘調査を行うと、別の側面が見えてきます。それは、弥生時代後期以降

この地に暮らした人びとが、度重なる地震などの自然災害と向き合いながら住居や水路を造り、限りある資源を上手に転用しながら水田を営んで豊かな暮らしを育んできたことです。歴史の表舞台には登場しない土地ではありますが、ここには根強く生きた人びとの痕跡が静かに残されています。

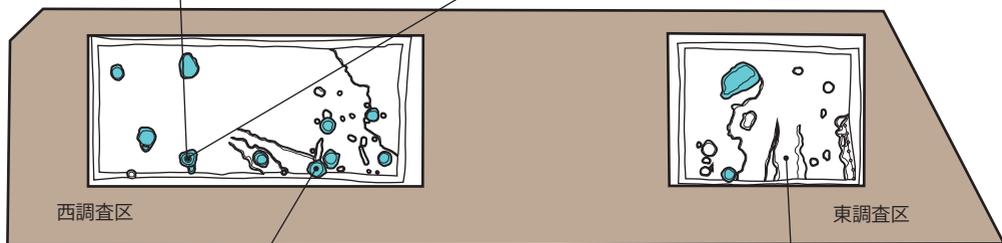


写真37 西調査区(東から)(J18)
(写真:(株)珠流河国文化財調査研究所より)

2号井戸(SK03)漆器椀①



2号井戸(SK03)漆器椀②



西調査区

東調査区

7号井戸(SK10)漆器椀



遺構縮尺 1/500



2号溝状遺構(E-SD02)漆器椀

第11図 井戸から出土した漆器椀(J18) (提供:(株)珠流河国文化財調査研究所に加筆)

時代区分		主なできごと	本書に登場する事柄	
旧石器時代		箱根火山の爆発的噴火		65,000年前
	後期	細石刃が日本列島全体に広まる		
縄文時代	草創期	土器・石鏃の使用が始まる		16,000年前
	早期	定住化の進行 気候温暖化による海水面上昇（縄文海進）		11,500年前
	前期	羽根根貝塚がつくられる		
	中期	東日本で環状集落がつくられる 久野一本松遺跡の環状集落		5,500年前
	後期	祭祀具の発達		4,500年前
	晩期			
	前期	水稻耕作の本格的な開始		
弥生時代	中期	中里遺跡の出現 奴国王、後漢光武帝より金印を受ける		57
	後期		集落で見つかる建物の形 水鳥文様の鏡（M1） 地震の影響を受けた集落 木製品	
	前期	前方後円墳の築造開始		
古墳時代	中期			
	後期	仏教伝来 久野古墳群		538
古代	飛鳥時代	大化の改新 千代寺院跡の造営	青銅製散蓮華小匙（J7）	645
	奈良時代	平城京へ遷都		710
	平安時代	平安京へ遷都		794
中世	鎌倉時代	源頼朝が征夷大將軍に任じられる	下堀宮ノ脇遺跡第Ⅰ地点の 三筋壺、下堀方形居館	1192
	南北朝時代 室町時代			
	安土桃山時代	小田原城が築城される 小田原城総構の完成 豊臣秀吉の小田原攻め	馬の骨（J13） 漆器椀（M5・J18）	1590
近世	江戸時代	江戸幕府が開かれる 富士山宝永の大噴火 ペリー来航		1707 1853
			「足柄下郡別堀村明細帳」	1853
近・現代	明治	明治改元、五箇条の誓文の公布	明治9年（1876）の家数8戸	1868
	大正 昭和	太平洋戦争終結		1945

文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。別堀遺跡群をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』青海社
大阪府立弥生文化博物館編 2020 『弥生農耕―田んぼとはたけ―』令和2年度秋季特別展
大阪府立弥生文化博物館図録70
- 小田原市教育委員会 2010 『高田遺跡群・下堀方形居館―古代高田郷と中世の居館―』小田原の
遺跡探訪シリーズ5
- 小田原城天守閣 2014 『いにしへの小田原～遺跡から見た東西文化の交流～』小田原城天守
閣特別展図録
- 佐々木健策 2010 「小田原のかわけと漆器」葛西区郷土と天文の博物館編『葛西城と
古河公方足利義氏』雄山閣
- 右島和夫監修 青柳泰介ほか編 2019 『馬の考古学』雄山閣
- 平塚市博物館 2019 『平塚学入門』2019年度夏期特別展 展示図録
- 山梨県立博物館 2014 『甲斐の黒駒―歴史を動かした馬たち―』山梨県立博物館企画展示図録

小田原の遺跡探訪シリーズ16

別堀遺跡群

―「無御座候」の村―

令和3年(2021)2月17日 印刷

令和3年(2021)2月26日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印刷 有限会社 石橋印刷

